

★東海ローカルネットワーク

【愛知】

○無施錠宅、被害目立つ

県内の3割、三河は4割超

県内で今年1～11月末に発生した住宅への侵入盗のうち、無施錠での被害が3割以上に上ることが、県警への取材で分かった。特に三河地方では4割を超えており、県警は侵入盗が多発する年末年始を前に「まずは鍵を閉める習慣をしっかりと付け、大事な財産を守ってほしい」と注意を呼び掛ける。県警によると、11月末現在の住宅を狙った侵入盗の被害件数は3346件（前年同期比11.3%減）。このうち33.8%に当たる1031件が、無施錠の玄関や窓から侵入されていた。ガラス割りなどに次いで多い侵入手口が無施錠だという。地域別の内訳は、名古屋市内が24%、名古屋市を除く尾張地方が34%だった一方、西三河地方は41%、東三河地方は47%と全体を引き上げていた。特に三河地方の郊外や農村部などで、防犯意識が低い傾向にあるという。（2017年12月25日中日新聞愛知版）

○前畑電停上り、車いすOK 豊橋鉄道

床面低い一部車両で

豊橋鉄道市内線上りの前畑電停（豊橋市南旭町）で、バリアフリー化工事がほぼ終了した。運転士の手助けは必要だが、床面が低い一部車両では、車いす利用者も乗降できるようになった。前畑電停は、市総合福祉センターあいトピアと市障害者福祉会館さくらピアの最寄り駅。車いす利用者が施設を訪れる手段が広がることになる。下り電停も来月着工し、来年二月から利用可能になる予定。工事後の前畑電停のホーム幅は1.5メートルほどで、旧ホームの約2倍に広がった。スロープも付け、これまで進入できなかった車いすも入れるようになった。床面が高く、階段で乗り降りする旧型車両では難しいが、床面が低いT1000形車両（ほつトラム）など一部車両では車いす利用者も乗り降りできる。（2017年12月19日中日新聞愛知版）

○サーフィン国際大会

田原で来年9月開催

サーフィンの世界最高峰の大会で、国際サーフィン連盟（ISA）主催の「ワールドサーフィンゲームス」が来年9月、田原市で開かれることが決まった。市によると、国内開催は1990年の宮崎県と新島（東京都）以来二回目。田原市では世界プロサーフィン連盟の世界大会や日本サーフィン連盟の全国大会が開かれた実績があり、市が昨年5月ごろからゲームスを誘致していた。大会期間は来年9月15～22日を予定。太平洋沿岸部に位置する大石海岸と赤羽根西海岸が競技会場。サーフィンは2020年東京五輪の追加種目

となった。（2017年12月12日中日新聞愛知版）

○マルシェにぎやかに

江南・愛栄通商店街で初

手作り雑貨や飲食などの出店が並ぶ「江南マルシェ 藤の市」が9日、江南市古知野町の愛栄通商店街であり、子ども連れの家などなどにぎわった。閉店した店が多い商店街に活気を取り戻そうと、以前よく遊びに来たという市内の女性たちを中心となり、初開催。シャッターの下りた元商店などの軒先に、市内外の作家による手作りアクセサリーや焼き芋などを販売する30店が並んだ。子どものころ、休日のたびに商店街で買い物を楽しんだという同市古知野町の主婦（47）は、家族や友人と来場。軽食の行列に並びながら、「商店街にこんなに人がいるのは久しぶり。うれしい」と喜んだ。（2017年12月10日中日新聞愛知版）

○若宮商高の閉校に慎重意見相次ぐ…

有識者懇「希望者増 市は分析を」

名古屋市立若宮商業高校の閉校問題で、市立高校の再編について話し合う有識者懇談会が25日、市役所で開かれ、出席者から、進路希望調査で同校の倍率が商業高校で県内トップに上ったことを受け、閉校に慎重な意見が相次いだ。県教委が21日に発表した調査結果によると、同校は定員200人に対して、第1希望者が263人となるなど、同市内の5校を含む県内11の公立商業高校で最も高い倍率となった。懇談会では、「これだけ希望者がいる学校を減らす対象とするのは市民感情としてよいのか」や「希望者が増えていることについての市の分析が必要だ」などの意見が出された。市教委は、来年2月予定の次の会までに分析するという。（2017年12月26日読売新聞愛知版）

【岐阜】

○民間の停留所を募集

岐南町コミュニティタクシー

車を持たない住民の足となっている岐南町のコミュニティタクシーで、町が新たな停留所を民間から募っている。町内のスーパーや病院など民間業者が対象。住民がよく使う施設を停留所にし、利用者を増やす考えだ。コミュニティタクシーは2009年10月、巡回バスの廃止に伴って導入された。一時間前までに電話予約すれば、50カ所ある停留所間をタクシーが運んでくれる。複数の利用者がいれば、最も効率の良いルートをタクシー会社が選んで運ぶ。利用料は一回200円。開始当初、利用者数は一年で2469人いたが、その後は年々減少。今年9月までの一年間は、当初より6割少ない1037人にとどまっている。現在の停留所は全て公共施設の前にある。新たな停留所には年2万円の登録料と、初回に限って標識製作費1万円が必要。

町の担当者は「店の前で乗り降りするため、店の利用者増につながる効果もあるのでは」と話す。(2017年12月29日中日新聞岐阜版)

○イチゴ出荷は岐阜市が県内1位 就農者定着などで初

岐阜市内のイチゴの出荷量が、2016年度に初めて県内1位となった。市内の研修施設を卒業した新規就農者の定着や技術向上が、収穫量の増加につながるとみられる。市によると、一六年度の出荷量は前年度比で16トン増の計300トン。2位の本巣市を41トン上回った。1950年代に栽培が始まって以来、本巣市が1位、岐阜市は2位の状態が続いてきたが、初めて逆転した。▽岐阜市とその近郊を管轄するJAぎふによると、管内(6市3町)で09～16年度にイチゴで新規就農した計23人のうち、岐阜市内が14人を占める。研修所が岐阜市にあることや、生産者の組織が充実している点などが理由と考えられるという。(2017年12月20日中日新聞岐阜版)

○子ども食堂団体補助、申請わずか1市／岐阜県

家庭の事情で十分に栄養を取れない子らに食事を提供する「子ども食堂」の運営を支援しようと、県が本年度に始めた市町村への補助事業で、現時点の申請が1市にとどまっていることが分かった。県議会一般質問で、県側が明らかにした。800万円の予算のうち、執行は50万円のみとなる見通し。事業は、食堂の運営団体に対し、市町村を通じて運営費の半額程度を補助する内容。中川裕子議員は、執行実績が「12月時点でゼロとなっている」と述べ、法人格のある団体による運営、月1回以上の開催などとする補助条件が「実態に合っていない」と指摘した。(2017年12月9日中日新聞岐阜版)

【三重】

○熊野サンマ、まだ漁獲ゼロ

昨季も不漁、募る不安

11月から12月初旬にかけて熊野市の漁港で初水揚げされるサンマが、今季は22日現在、確認されないままとなっている。昨季は漁獲ゼロだっただけに関係者は不安を募らせている。熊野漁協によると、サンマ水揚げは2008年度までは千トンを超えることが多かったが、その後は減少傾向。15年度は200トン余りにまで落ち込み、昨年度はゼロだった。(2017年12月23日中日新聞三重版)

○国保料、17市町で増額 三重県が試算公表

国の制度改正で来年四月から運営主体が市町から県に移る国民健康保険について、県は、現時点で把握できる数値を基に試算した来年度の市町ごとの保険料総額などの推計額を公表した。1人当たりの年間保険料は、全29市町のうち十七市町で増える見通し。ただ、高齢化による医療費増加などに伴う増額で、

県は「制度改正による加入者の負担増がないようにした」と説明する。国保は自営業者らが加入しているが、近年は高齢者や低所得者の割合が増え、財政が悪化していた。今後、小規模な自治体では急激な医療費増に対応できない恐れもあるため、来年度から運営規模を市町村から都道府県に広げ、財源の安定化を目指す。予算編成に向け、県は各市町が2018年度に財源として県に支払う納付金を試算し、一六年度決算からの増減を調べた。制度改正と関係なく、高齢化や医療の高度化を理由に18年度の公的負担は16年度決算と比べ6.17%増えることが見込まれると分かった。(2017年12月7日中日新聞三重版)

○電力安定供給へ原発再稼働を

中電専務ら必要性訴え 三重大学生9割「賛同」

エネルギーをテーマにしたパネルディスカッションが19日、三重大学の三翠ホール(津市栗真町屋町)であった。中部電力の渡邊広志専務執行役員ら4人がパネリストとして出席し、電力の安定供給を維持するためには原発の再稼働が必要だと訴えた。参加した学生への電子投票も実施し、約9割が原発の再稼働に「賛同できる」と回答した。渡邊明名誉教授(経営学)が工学院生を対象に開く授業の一環。平成23年度から年に一度のペースで開いている。この授業では4月から、中部電力の執行役員ら7人が発電の仕組みやエネルギー政策をテーマに講演してきた。▽学生らがリモコンのボタンを押して意見を表明する電子投票では、「安全が確認された原発の再稼働をどう思うか」との質問に、参加者の約86%に当たる25人が「賛同できる」と回答した。(2017年12月20日伊勢新聞)

○世界2匹目のハチ発見

三重県総合博物館の敷地から 国内初確認

三重県総合博物館(津市一身田上津部田)は12日、国内では生息が確認されていないハチが、同博物館の敷地内から見つかったと発表した。体長5ミリで鎌状の前足が特徴。発見は中国に続いて世界で2匹目となる。22日から同博物館で展示する。見つかったのは、ホソクビカマバチ属の一種で「ネオドリヌス・イソネウルス」と呼ばれる。鎌状の前足が特徴だが、県内などで生息が確認されているニホンカマバチとは体色などが異なる。カメムシに卵を産み付けるといいますが、詳しい生態は分かっていない。9月9日午前、博物館が実施する昆虫の調査に参加していた菟野町出身の九州大院1年、辻尚道さんが敷地内の林で発見。同大農学部昆虫学教室の三田敏治助教が調べたところ、平成9年に中国の雲南省で見つかった新種として発表されたハチと分かった。(2017年12月13日伊勢新聞)